

そそぐ母とあおぐ私

やまだようこ

1 上位の偉大な母と、下位の卑小な私

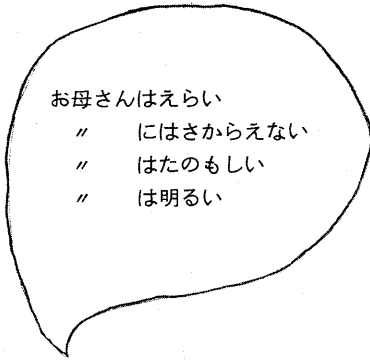
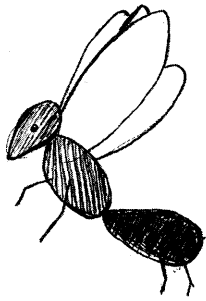
視覚的イメージというものはふしぎである。そこには、人が潜在的にもっている価値観が意外にはっきりと生のかたちで現われる。

かつて「隣の車が小さく見えまゝす」と得意そうに叫ぶコマーションルがあった。「大きいことは良いことだ」と単純に信じられていた、高度成長期のことである。だがオイルショックを境に情勢が変わった。大きい車は、有限で貴重な地球のエネルギーを余分に消費する、やっかいものであると認識されるようになった。そして小回

りのきく小型車のほうがよく売れる時代になった。

それでも私たちは、「大きいことは良いことだ」という根強い価値観をひっくり返すところまではなかなかない。背の高い外国人の側に立つと、妙に劣等感をおぼえる。女性は結婚希望の男性に、背が高い人という条件をあげる。子どもは早く「小人」ではなく「大人」になりたいと願う。

一寸法師のような小人こびとが活躍する物語が愛されるのは、大が小をやっつけて「やっぱり大きいものは強かったのです」というお話が現実世界では当り前すぎるから

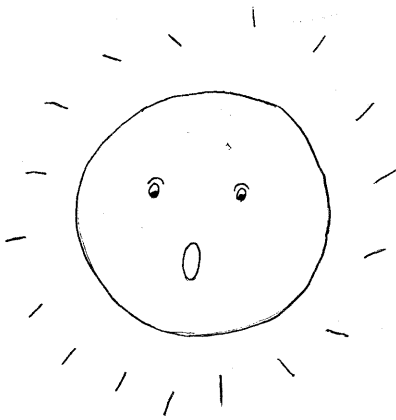


お母さんはえらい
 // にはさからえない
 // はたのもしい
 // は明るい



▲ 図1 偉大な母

であろう。「さんしょは小粒でも辛い」「ウドの大木」などの言葉もないわけではないが、「器の大きさ」「志の大きさ」「気持の大きさ」など「一般的には何によらず大きいことは良いことであり、強い、たくましい、立派などの価値を表わす記号しごになりやすい。そして空間的にも、



◀ 図2 太陽(母)と小さなアリ(私)

上や高い位置にあるものは、下や低い位置にあるものよりも、良い価値をもちやすい。だから母子関係を描く絵の、母親と自分の物理的大きさや、空間的位置関係の表現のしかたは、その人の母親に対する評価と密接に関係しているようである。

アリ
 和

図1と図2は、「母は私より圧倒的に大きい」「母は私よりはるかに高い所にいる」「母は私にはない特別な能力をもつ」と認識された場合の構図である。これらの母は、地面をほう小さいアリと違って、羽があって空を飛べたり、空の高みにいる偉大な存在として、卑小で価値の低い子どもと対比的に描かれている。

2 尊敬され仰がれる母

図3と図4は、子どもに尊敬され、あこがれの対象とされる母の姿である。子どもは母なる大空や山を仰ぎ、できることなら自分もそこへたどり着きたいと、両手をあげて求め背伸びをしている。

大きく高い山、大きく高い青空、ちっぽけな人間に比べて、それらはいかにも大きく、また遥かな高みにある。人は身近かにあつて手を伸ばせば簡単につかめるもの、自分の手の内に入る小さなものではなく、遠くにあつてとても届きそうもない高貴なものに対して、あこがれる。

母の方から子どもに手をさしのべなくても、子どもが母の姿に理想像を見て、「母のようになりたい」と願

◀ 図3 高い山(母)を仰ぐ私



母は私にとって目標だった。私にできないことを何でもてきた。そんな母は山みたいだった。頂上がどこかわからない。私は何とか山と同じになりたいともがいている。

幼いとき、私は母を神様のように思っていました。母の言うことは絶対だったし、母を信頼し、尊敬し、ただで甘えて反抗ばかりしていました。私はいつも母にすがろうとしていました。母にとっては迷惑だったでしょう。



▲ 図 4 大空（母）を仰ぐ私

い、現状に満足しない高い望みやあこがれを抱くならば、それだけで子どもを大きく育てる原動力になるのだら

う。

だがこのような威厳にあふれた母親の像は、現代の日本では少なくなりつつある。一九八一年の総理府国際比較の調査によると、十五歳で「お母さんを尊敬している」と答えた子どもは、アメリカ、タイ、イギリス、フランス、韓国では九十パーセント以上いたが、日本では七十パーセント、「お母さんのようになりたい」子どもも、日本では五十パーセント以下にすぎず、諸外国に比べて極端に低い割合であった。

3 光をそそぐ太陽としての母

「空の高みにいる偉大な母」の姿を表わす、もっともポピュラーなイメージは「お日さま」である。自己を上から照らしてくれる「太陽のような母」は、下積みの土台となって下から支えてくれる「大地のような母」の対極にたつ。両方とも子どもの存在よりもはるかに大きいから、子と同じ人間として描かれるよりも、自然に喩えられやすい。

しかもこれらは、山や空のように高く大きい存在というだけではなく、生き物に栄養をそそぎ育くむという性質をもっている。太陽も大地も母の比喩としてはあまりにもありふれたものだが、生き物を滋養する偉大な自然のふたつのあり様をこれほどびったり表すものは他にない。

人間を含めて生き物は太陽のおかげで生きており、太陽を求めて伸びる。だが近づきすぎれば焼け死ぬから、太陽は遠い存在であって、決して身近には寄れない。生き物は太陽の光にあこがれ、それを仰いで暮らす。

太陽の構図に典型的にみられる「上部の高い位置にいて、大きくて圧倒的に力が強い母」と、「下部の低い位置にいて、小さくて卑小で弱小な私」が対比される構図は、実は先回の「おとす母とうたれる私」のなかの、「上から監視する母」「見下ろす母」「かなづち」「雷」などの構図と基本的には同じである。

同じような配置の構図が、まったく違う雰囲気で、一方では「偉大であたたかく自分を見守り光をそそぐ太

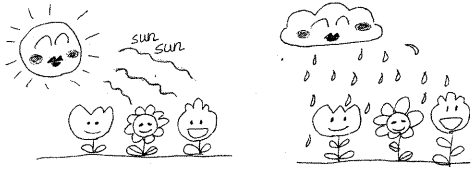
陽」として、もう一方では「尊大な権力で冷たく自分を監視し打ちたたたく怖い雷」として認識される。しかし両方とも自己像よりはるかに大きく強力で、上下関係にあることは同じである。

同じような位置関係でも、そがれるものが自分を育て成長させる恵みの日の光なのか、自分を怯えさせ打ちつける怖ろしい電撃なのか、何が自分にそがれるのかによって正反対の雰囲気になる。

母の機能は、通常はひとつだけに決めることができず複合的であるし、時と場合によって違うから、図5のように、あるときには母はあたたかい日の光であり、あるときは雨を降らせ雲であり、あるときは怖い雷であるというのが、いちばん一般的な姿かもしれない。だがこのようにいろいろに変化しても、自己を表わす花と母親との空間的位置関係は変わっておらず、母親が常に「天上」に位置づけられ、自分にいろいろなものを上から降り注ぐ存在として描かれていることは、この絵の場合にも一貫している。

優しいとき

大きく育ててくれた様子



厳しいとき

▲ 図5 太陽、雲、雷の母

私は、両親にとっては初めての子であったからかもしれませんが、とても、大切に育てられたと思います。特に、一日中接している母の印象は深いです。たぶん母は私を長子であったため、育児書などを見ながら、おっかなびっくりで育てたのではないのでしょうか。

母は私を、「守ってくれた」のだと思います。優しく、そして時には厳しく。その姿は、植物にふりそそぐ、太陽の光・恵みの雨・冷たい風・かみなりなどに比喩できると 생각합니다。

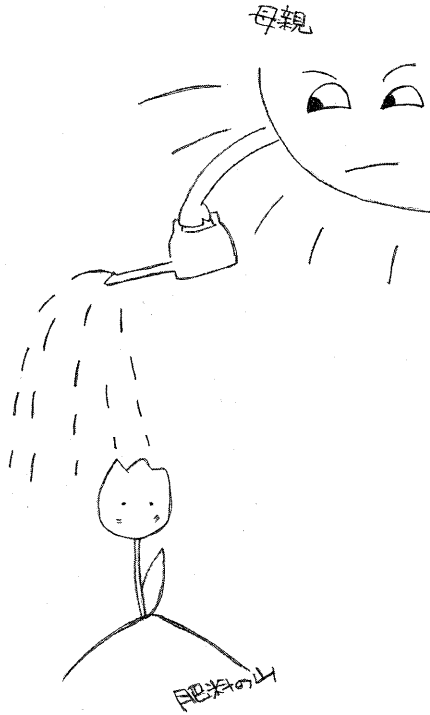
母が私を見守る太陽であったとする。その恵みを一身に受け、まっすぐ天に向かってすくすく育つひまわりが私であったと思う。言われたことを素直に受け止め、いつも母を追いかけ、絶対的な存在であると思っていた。



◀ 図6 絶対的な太陽(母)とひまわり(私)

4 子どもの側からみた日光
物理的には同じ日光がそそがれたとしても、子どもの

母親…強い直接日光と水と肥料を作って花を純粹
培養する太陽的存在
私…花



▶ 図7 花(私)を純粹培養する強い日光(母)

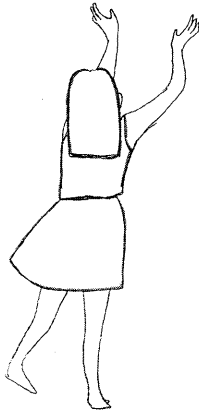
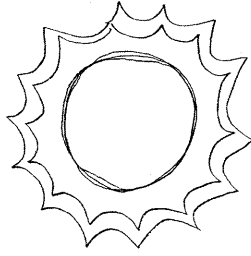
性格や受けとめかたによって、その見方がちがってくる
こともある。図6と図7には、太陽のもつ微妙なちがいが

が表現されている。絶対的な太陽の意向のままに素直に
回る向日性のひまわりのような子どもには、親の光はあ
たたかい恵みそのものにみえる。だがそれも、突き放し
て批判的に見る子どもには、太陽ママゴンの過剰光線と
紙一重の差に見えるかもしれない。

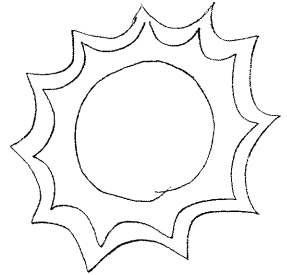
親子関係は、一方的な親のありようだけでは決まらな
い、相互的なものである。だから子どもが親を「尊敬で
きる偉大な存在」と感じるか、「尊大で強制的で権威的
な存在」とみなすかによって、機能が一変する場合もあ
る。母の側では、子のためにそそぐ「愛情の光」だと
思っても、子の側からみれば「監視の目の光」にしか見
えないこともあるだろう。

図8と図9は、幼いときには母なる太陽に向かつてす
くすく伸びていた子どもが、青年期の現在では、母の光
線をさえぎって暗い箱に閉じこもっている絵である。こ
のように青年が自立に向うときには、あたたかく、ぬく
ぬくとした日の光をあえて拒否して、暗闇のなかで不自
由で惨めで孤独な自己を耐え忍び、身を縮めて震えなけ

◀ 図8 太陽(母)を求めてのびる私
 (図9を描いた人の幼いときの私)



母の熱を求め
 それに支えられていた



▶ 図9 太陽(母)の光を拒否する暗闇の私
 (図8を描いた人の現在図)



母の熱をさえぎって
 一人でふるえている

ればならない過程も必要である。母の光は、いつも子どもを育む良いものとして機能するとは限らないのである。

(愛知淑徳大学)